

ヴィラ・イザベウ 2013 年

G.R.E.S. ウニードス・ヂ・ヴィラ・イザベウ 2013 年

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

農村の仕事とは、すなわち、多くの汗、献身、土への愛の産物であり、これをもってブラジルを世界の農業分野において目立たせ、世界に冠たる農業国に向けた大きな歩みを可能たらしめているものです。

これらの地方的な農業活動は、何百万もの雇用と富を生み出し、我が国の大国としての成り立ちに貢献しています。我が国の国富は、我が国の豊かな土壌における耕作にとりくんでいる何百万もの男性、女性、若者たちに多くを負っているのです。

ブラジル人には、もてなす心と尽くす心があるとの評判があります。一杯のカフェジーニョで、会合の場がなごむとか、食後の食卓で会話にきっかけが生まれるとかいうこともよくあります。不意の来客や、大きく遅刻した招待客でも、常に歓待されます。結局のところ、一人で食べられるなら二人でだって食べられるのです。つまり、いつでも、(ジョルジーニョ・ド・インペリオが歌ったように、)「また一人客が増えたから、フェイスジョン(を煮た鍋)に水を足せ、、、」ばいいのです。

我が国の自然環境は気前の良いことに、私たちに色々なものを与えてくれます。日々の糧となるフェイスジョン、パンのもととなる小麦も、フバーのもととなるトウモロコシ、味付けのもととなるタマネギ、ニンニク、つけあわせのファリーニャのもととなるマンジオッカも、、、

「オレの住んでる片田舎、ここは美しい小道
雄鶏が朝早く鳴く、窓の近くで
オレは起きる、礼拝堂の小さな鐘が鳴るころ
そんでもってオレの畑に向かう、護衛は神様だけだ
オレのランチは、パンとハムってときもある
でもオレの母屋の、ヨメとチビスケどもには
鍋に入った鶏肉があるんだ」(ロウレンソ、ロウリヴァウ)

「なんて質素な暮らしだ、でもなんていい暮らしだ
メシは神聖だ、鶏肉とオクラ
田舎風のタマゴにライスとフェイスジョンもついで
大した手間もなくランチを片づけて
小屋の中でごろりと横になるオレ」(ジョアン・カルネイロ、カパターズ)

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

こうした気前の良い自然環境こそが我が国の誇りです。国富は大地からもたらされるのです。この土壌から、我々が祖国の偉大さが生じているのです。我が国が進歩を達成するのも、この緑の美しい農場からもたらされる産品によってなのです。したがって、この神聖なる領地が提供する広大・膨大な土地であるからこそ、そこに、全人類にとっての穀倉、すなわちこの惑星全体にとっての食糧生産供給者への変革が生じ得るのです。

それでは、この豊かな土壌の管理は誰がやってくれるのでしょうか？それが、農民、この、土地を最も大事なものとする、並外れた、大胆な、徹底した労働者です。農民は、土地を富を生み出す状態へと変え、土地を文明国の一部として取り込み、決して自然一緑の森一を破壊することなく耕作を拡大するという使命を担っています。農産品という結果を出すことによって、この豊穡の惑星を、豊かな食卓があって夢が実現する世界へと変革することができるのです。

「誰かが戦争して
飢餓と悲しみをもたらすあいだでも
オレの戦いは土地を相手に続く
食卓にパンが絶えないように」（ジョエウ・マルケス、マラカイー）

「ヨメよ、よろこべ
友達が来るぞ、話しに
きっとオレに言えないぐらい腹すかしてる
きっと一昨日あたりからのど渴いてる
だからフェイジョン(の鍋)に水を足そうじゃないか、、、」（シコ・ブワルキ）

自然のまま持続可能性を備えた大地があり、それがさらによくなる可能性があるのです。よく言われるフレーズの通り「植えればなんでもなる」のです。もちろん、日々おこなわれる大宴会に参加する人々の食欲や私たちが生きる惑星の懸念についても考えさせられます。私たちの子供たちや孫たちの可能性に害を及ぼさないように、賢く、各々の土地を利用しなければなりません。食糧を増やせ、ただし耕作地を拡大せず！

「ウチにでっかいヤシの木があるけど、ちっちゃいやシしかないんだ、、、
でっかいヤシが欲しい場合は、ちっちゃいやシの木じゃないとだめなんだ、、、」

大きいことが優れていることの証明とは限りません。ちっちゃいやシの木の話にならぬ、よく頭を使って、農地の 1 センチ 1 センチをうまく利用して産出量を増やすことを考えるべきでしょう。土壌の劣化を防ぐには、昔ながらのワラ敷きが有効です！

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

我が国を形成した 3 種族——白人、黒人、インディオ——に、様々な民族が加わり、我が国の農業分野の伝統を作ってきました。ドイツ系、日系、イタリア系、その他少数民族も、等しく農業に貢献しています。

農業と同様に、田舎の音楽もまた、ブラジルの起源を示すものです。

「よく演奏されるのは、オレたちの心の内のサウダーヂ——何についてのサウダーヂかもわからないけど——を呼び覚ますやつ、、、」

ヴィオラ(カイピーラ)の音色は田舎の音楽を奏で、それによって、土地に生き、戦い、成功し、この国を成長させた人々のことを物語るようです。

ヴィオラの音色は、過ぎ去りし日々のサウダーヂをもたらし、単純な韻文詩にまとめられた人生を歌いあげ、田舎の人々、すなわち、頑固一徹で献身と知識をもって土地を富にかえた農民の、素晴らしい仕事ぶりを表現します。

カマラ・カスクードによれば、「我々は皆、歌謡舞踊民族の末裔」であり、それが、田舎の音楽の形成を促したといえるでしょう。

優れたヴィオラ奏者は、直観的に自然界のシグナルを読み取り、それを歌に表現します。心の中に世界をわたる方位磁石を備えているかのようです。伝統の翼にのせて、出身地や生きる知恵を詩の形で歌う芸術家です。

「雲の上をひとまたぎ
雷の直撃を受け
雨の中でオレは踊る
ピーカンのときと同じく、、、」(ロウリヴァウ・ドス・サントス、プリミーニョ)

最初のヴィオラ製造工場は、カンポ・トリスチのコッヘゴ・ダ・フィゲイラ農場に設立されました。シャドレス(チェス)というブランドの製造者です。

「フィゲイラ農場で
デーゴとその弟は
未開の森に分け入り
木材を探した
ヴィオラをいっちょう作ろうと

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

ヴィラ・イザベウ 2013 年

それですぐに一発目を作った」(アントニオ・パウリーニョ)

「その赤いヴィオラ

軍旗と同じ色

カボクロの血と同じ色

この土地の土ぼこりと同じ色」(チアオン・カヘイロ、ジェズース・ベウミーロ)

「ヴィオラの音はこたえたぜ

オレの胸にグサリと来たぜ、兄弟

だもんで、オレは歌うことにしたんだ

誰に習うでもなく」(ペアオン・カヘイロ、ゼ・パウロ)

「ヴィオラはオレのことをよく知ってやがる

オレひとりじゃ歌えないって

もちろん一人でもオレはうまく歌える

一緒だともっとうまく歌えんだ」(カヘイリーニョ)

「ボクのヴィオラは

訳あって泣いている

悔いているのさ

ボクの心を盗んだ悪事を」(ノエル・ホーザ)

音楽の世界は、人の魂の世界でもあります。そこに、都会であろうと田舎であろうと、限界はありません。詩は景色と結びつき、景色は感情と結びつきます。

「ピラシカーバ川は、水を下流へ流しだす

誰か泣いている人の目から落ちる

涙が届けばそれも流してくれる

オレの家のそばにも

もう湖ができちゃった

オレの目から落ちた涙で

ある人のことで泣いたことで」(ロウリヴァウ・ドス・サントス、チアオン・カヘイロ、ピラシー)

「オレは神様に願掛けをした

雨を降らせてほしいと

この作物が育つように」

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

雨が降らない時に、人々は願掛けをします。このケースでは、神様は 3 滴だけかなえてくれたようです。

「1 滴は雨が降った。2 滴はオレの目から落ちた。」（ハウール・トーヘス、ジョアオン・パシフィコ）

願いがかなわないと聖人たちまでも、教会の移転という罰を受けることがあります。おそらく、もっと農村の問題に目を向けてほしいという気持ちの表れでしょう。

「陶製の聖ジョゼが
処女受胎教会本院に安置されることになった
居心地の悪くなった受胎のマリア様は
オレたちの祈りを聞いてくれるだろう
オレたちを救ってくれるだろう
旱魃から、洪水から、
このひどい季節から
バホメウ・ペドラ・サバオンが
ナザレの星の母を奉る祭壇へ行く
ナザレはロバで運び出される
聖ジョアンの僧院へ
そして福音の聖人ジョアンは、聖ジョゼの聖堂へ
みんなの暮らしがこのまま上向かなければ
聖人が元の場所に帰りたいとしても
歩いて行くしかない」（シコ・ブワルキ）

動植物もヴィオラの曲によく取り上げられるテーマです。

「歌え、歌え、ベン・チ・ヴィ(キバラオオタイランチョウ)
お前の歌を聴かせてくれ
歌え、歌え、サビアー(ツグミ)
オレを慰めてくれ」（アウヴァレンガ、ハンシーニョ）

「オレは聴きたい、シリエーマ(ノガンモドキ)が
汝イラセーマのために歌うのを
この満開の我らが園にて」（マリオ・ザン）

「オレは彫金細工のついた鞍を買った

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

なめし皮の中敷きと

白いクッションも

ウチの馬を乗りまわすように

リングの胸巻も

そして輝く星も

そして羊どもものところに回ってみた

まあ、なんかないかなと思って」 (アナクレート・ホーザス・ジュニオール、アルリンド・ピント)

田舎の男の音楽は、1920年代にレコード化が始まったことをきっかけに、猛烈な勢いで普及するようになりました。今日では、このジャンルは普及しまくりです。大々的なショーが催されていますし、題材も進化し、演奏技術、作曲構成も洗練されたものとなっています。それでも、人々を揺さぶる魂は不変です。田舎の、ブラジルの魂です。

「畑で踊ろう、君よ、こうして踊れば

オレは彼女の腰に手を回し、彼女はオレにもたれかかる

アコーディオン弾きが演奏する、明るく

さあ、みんな、一緒に踊ろう、夜が明けるまで

踊れ、踊れ、モレーナと、踊れ、踊れ、金髪と

舞踏会は畑で始まって、台所で終わる

畑の舞踏会バンザイ、聖ジョアンの夜バンザイ

こうしてブラジル人は伝統を守るんだ」 (トウニコ、チノーコ)

そして今日、サンバで、農民を称えます！サンビスタたちが、この真の価値をもつ人物像を永く留めるべく称えます！ ヴィオラが、パンデイロ、ショカーリオ、スルド・ヂ・プリメイラと一体となり、サンビスタの文化と田舎の男の文化がひとつになります。紙テープや紙吹雪が舞う、この輝かしい舞台に、ノエルとマルチーニョを有するヴィラが、この名高い、独特で、ブラジルらしさに溢れた人物、農民、を称えにやってきます。彼こそ、我らが称賛に値する人物です！！ 世界の食を支えているのはブラジルの農民なのです！！

文責 ホーザ・マガリヤニス(カルナヴァレスカ)、アレックス・ヴァレーラ(歴史考証)、マルチーニョ・ダ・ヴィラ

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”

ヴィラ・イザベウ 2013年

(サンバ・エンヘッド)

作： マルチーニョ・ダ・ヴィラ、アルリンド・クルース、アンドレ・チニース、トゥニコ、レオネウ

雄鶏が鳴いたんだ
小鳥たちと一緒に、朝の輝きの中で
夜が明けるのを迎えられたことを神様に感謝すんだ
ちっちゃな教会の鐘が時を知らせんだ
コーヒーをいれんだ
ヴィオラを手にとんだ、信心深い相棒だ
畑に向かうんだ、で、豆を植えんだ
生えてくるもんで腹ごなしすんだ
ちょっとした仕事だ、、、
この土地を鋤いて耕して
昔の夢が花開くのを見んだ
世界に食いもんを出してやんだ、いい人生だ
感動が花開くんだ

おいヨメ、仲間が来たぞ
椅子ひっぱってきて、話そうや
鍋のフェイジョンに水たしとけ、かまどに薪は用意してあつから
ボーロ・ヂ・フバ作ってくれ

鍬に汗がしたたんだ
この土地は祝福されてんだ
投資して、よく知って、
進歩して、分け合って、守んなきゃいけねんだ
日が落ちて、ランプに火つけんだ
月明かりが差して、巡礼の列を照らすんだ
夜には、歌の会があんだ
で、サンバの人らが来んだ
それがヴィラ、詩が生まれる大地、サンバの達人を抱える穀倉だ
ヴィラ、詩が生まれる大地、サンバの達人を抱える穀倉だ

村祭
そこらにある、いいもんだ
アコーディオンの音にのって、オレとお前とで
ヴィラは植えに来んだ
幸せを、夜明けに
村祭
すぐ近くにある、いいもんだ
アコーディオンの音にのって、オレとお前とで
ヴィラは採りに来んだ
幸せを、夜明けに

“ヴィラは世界の穀倉たるブラジルを歌う——「豆煮た鍋に水を足せ。また一人客が増えたから。」”